

スポーツ経営学専攻学生を対象とした 野外活動（キャンプ）の成果の検証

— 学生の「生きる力（IKR 評定用紙）」の変容に焦点を当てて —

古田康生 / 山本孔一 / 渡部昌史

はじめに

- 1 A 大学平成 30 年度野外活動（キャンプ）の背景
- 2 研究課題の所在
- 3 「生きる力」・{IKR（生きる力）評定用紙}

研究目的

研究方法

結果と考察

まとめ

はじめに

1. A 大学平成 30 年度野外活動（キャンプ）の背景

A 大学では、平成 30 年度に、スポーツ経営学を専攻する学生を対象に、専門教育科目区分のスポーツ実習「野外活動（キャンプ）：

2 単位」(以下、キャンプ実習とする)を開講した。A 大学は、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、キャンプ協会）公認指導者資格「キャンプ・インストラクター」の養成課程認定団体であるため、今回のキャンプ実習カリキュラムは、表 1 に示したキャンプ協会指定カリキュラム⁹⁾に則り実施された。

本年度の授業では、自然体験活動、テント設営や野外炊事といった野外生活活動、集団宿泊を通し

表 1 キャンプ協会指定カリキュラムの概要

理論 (10 時間)	
1. キャンプの特性 (2 時間)	・キャンプの目的と意義・キャンプの組織と種類 ・キャンプのルールとマナー・環境教育とキャンプ
2. キャンプの対象 (3 時間)	・人間と自然の関係・人間の理解・自然の理解
3. キャンプの指導 (3 時間)	・キャンプインストラクターの役割・キャンプにおけるカウンセリング・指導者のためのコミュニケーションスキル・キャンパーの観察と記録
4. キャンプの安全 (2 時間)	・キャンプにおける安全の考え方・安全管理の実際① ・安全管理の実際②・事故事例に学ぶ
実技 (10 時間)	
1. キャンプの安全 (1 時間)	・ファーストエイドの実際・フィールド調査 ・危険予知とその対処
2. キャンプの生活技術 (4 時間)	・テント設営・野外炊事・工具及び道具使用法 ・ロープワーク・天気予報、観天望気
3. さまざまなアクティビティ (5 時間)	・野外ゲーム・キャンプソング・キャンプファイアー ・登山・ハイキング・キャンプクラフト・星座観察 ・自然観察・野鳥観察・冒険プログラム・ニュースポーツ・創作芸術活動・雪上活動・地域研究・水辺活動 ・各種パッケージドプログラム・オリエンテーリング・ウォークラリー・サイクリング・採集活動 ・ナイトプログラム・イニシアティブゲーム

て、それらの専門知識と技能の習得に加えて、公的な資格取得の機会を提供することも目標の1つとした。

(1) 指定カリキュラムの概要

キャンプ協会は、養成カリキュラムの時間数は必要最低時間であり、実施にあたっては十分にキャンプの体験ができるよう、余裕を持った講義・実習プランを計画するよう求めている。また、講義・実習方法については、『理論』は、指定テキストである「キャンプ指導者入門（日本キャンプ協会）に記載された内容を解説することを原則とするが、担当講師の経験や地域の特性に配慮した内容で実施する。」「実技」では、指定テキスト（理論同様）に記載された内容を行うことを原則とするが、実習会場となるキャンプ場の形態や地域の特性、実施する季節に応じた内容に配慮し、実施する。』と記載されている⁹⁾。平成30年度キャンプ実習では、上記の指定カリキュラムの内容と時間数を充たすよう実習プログラムを計画した（内容は方法参照）。

(2) 日本キャンプ協会公認指導者資格「キャンプインストラクター」

キャンプ協会によると、「キャンプインストラクター」は、キャンプでの活動（アクティビティ）を指導できる能力を持った指導者であり、基礎的なキャンプに関する知識、技術、考え方を習得していると認定される者に付与される。また、この資格は上位資格のキャンプディレクター2級、1級へステップアップするための基礎資格となる、とある⁹⁾。本年度のキャンプ実習では、2回の事前研修、2泊3日の宿泊研修、事後研修、資格認定試験の合格の全てを充たすことで資格登録の申請が可能となるようにしたが、資格登録は任意とし、義務とはしていない。なぜなら、資格登録にはその費用が生じるため、学生の経済的事由を配慮したためである。

2. 研究課題の所在

A 大学でのキャンプ実習は、今後も継続して開講される。そのため、必然的にプログラム内容の改善が求められる。つまり、通常の講義科目や演習科目であれば、「学生による授業評価アンケート」が学期末に実施され、その資料により教員自らの授業改善が図られる。しかし、本キャンプ実習に関してはその対象外であり、改善の基礎的資料が存在しない。

大学生を対象としたキャンプ実習の「よりよいあり方」の模索に関する研究は、甲斐らの一連の研究報告がある⁶⁾⁷⁾。それらは、授業（実習）のねらい達成度やアクティビティの満足度を調査し、その結果、自己との対面などによる自己発見に関する評価が低く、自然環境や他者（仲間）から与えられる影響が大きいと報告している。また、「生きる力（IKR）評定用紙」¹⁴⁾を用いて評価を行い、「生きる力」に肯定的変容が認められれば、良いキャンプであるという立場をとり、授業（実習）

スポーツ経営学専攻学生を対象とした野外活動（キャンプ）の成果の検証（古田ほか）の評価を試みている。その結果、「生きる力」は、有意に上昇したと報告している⁸⁾。

3. 「生きる力」

1996年、文部科学省中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」¹⁰⁾において「生きる力」の育成が提言され、生活体験・自然体験活動や社会貢献活動の機会増加が求められた^{11) 12)}。答申では、「生きる力」とは、3つの力を柱とした全人的なもので、次の3つである。

(1) 自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力。あらゆる情報の中から自分に必要な情報を選択し、主体的に自分の考えを築き上げていく力。

(2) 美しいものや自然に感動する心といった柔らかい感性。良い行いに感銘し、間違った行いを憎むといった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心など、の基本的な倫理観。他人を思いやる心の優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなどの社会貢献の精神。

(3) たくましく生きるための健康や体力。

また、前述の答申を受け、1996年に青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議¹³⁾が、「青少年の野外教育の充実について」において「生きる力」の育成について具体的な目標とその手段を記している。それを、表2に示した。

表2 「生きる力」の育成に関わる野外教育の目標と方法

青少年の野外教育の振興について（1996）

「生きる力」の内容		野外教育の方法
1	知性・知的好奇心	感動・驚きの体験
2	自然の理解	自然現象・自然仕組みの総合的学習、環境問題への認識
3	創造性・向上心・物を大切に作る心	成就感・達成感（素朴な生活、困難不便の克服）
4	生き抜くための力	生活の知恵（知識、技術、危険と安全）
5	自主性・協調性・社会性	小グループでの生活・活動（協力・援助）
6	自己発見・余暇活動の楽しみ方	新しい体験
7	心身リフレッシュ・健康体力の増進	時間的、空間的な落ち着きとすがすがしさ

4. 「IKR（生きる力）評定用紙」

橘と平野は¹⁴⁾、「生きる力」を測定するために、その構成概念を明らかにした。この「IKR（生きる力）評定用紙」は、14の指標（下位尺度）で構成され、尺度ごとに5つの質問項目があり、70の質問項目で構成されている。それらは、3つの中間尺度にまとめられ、さらにそれらを統合し、

上位尺度の「生きる力」を測定するため作成された評定用紙である。

研究目的

本研究では、A大学平成30年度キャンプ実習の成果を検討し、より充実した実習プログラムを計画するため、履修学生を対象に自記式質問紙調査を実施し、甲斐ら⁸⁾の先行研究を参考に、学生の実習前後の「生きる力」の変容に焦点を当て、実習成果の検討を試みることを研究目的とした。

研究方法

1. 調査対象

調査対象は、G県に所在するA大学スポーツ経営学科に在籍し、スポーツ経営学を専攻する2年次以上の学生39名(以下、スポーツ学生とする)とした。男子学生は36名、女子学生は3名であった(年齢:21.39 ± 0.79歳)。全対象学生は、平成30年度A大学キャンプ実習の全ての日程を履修した学生である。

2. 調査項目及び手順

2.1 調査項目

1) スポーツ学生のキャンプ経験などの基本的事項

履修目的、キャンプ経験延べ日数、経験内容を事前研修にて調査した。

2) 生きる力

本研究では、スポーツ学生のキャンプ実習前後の「生きる力」を調査するため、市河ら²⁾³⁾の方法を用いた。すなわち、子どもの「生きる力」を測定するために橘と平野¹⁴⁾が開発した70項目からなる「IKR評定用紙」の調査項目を基に、国立青少年教育振興機構が簡便にアンケート調査を実施できるように28項目に絞り込んだ「IKR評定用紙(簡易版)」¹⁾をスポーツ学生の「生きる力」の調査で使用した。本研究の対象者は学生であるが28項目による簡易版を用いた。それは、キャンプ実習直前・直後に測定するため、屋外の暑熱環境下で実施せざる得なく、対象学生の負担を軽減でき、短時間でできる簡易版を使用した。

「IKR評定用紙(簡易版)」(以下、「IKR評定用紙」とする)は、3つの上位能力、つまり「心理社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」により構成されている。その下位能力は、「心理

スポーツ経営学専攻学生を対象とした野外活動（キャンプ）の成果の検証（古田ほか）

的社会的能力」が、「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の7つの能力、「徳育的能力」は、「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」の4つの能力、そして「身体的能力」は、「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の3つの能力にて構成されている。つまり、「生きる力」は14の下位能力により構成され、実際の調査では、各下位能力が2つの質問により調査される。

1から28の質問項目に対して、6段階評定で回答し、「とてもよくあてはまる」は6点、「よくあてはまる」は5点、「あてはまる」は4点、「あまりあてはまらない」は3点、「あてはまらない」は2点、「全く当てはまらない」は1点で回答させた。28項目の総和を「生きる力」として分析した。3つの上位能力と14の下位能力についても、小計値を算出し、それぞれの能力値とした。

3) 自由記述の質問項目：「キャンプ実習の意義」

キャンプ実習を通してスポーツ学生が導き出したキャンプの意義を自由記述で調査した。なお、記述は、箇条書きで最大3項目までとした。記述された項目は、カテゴリー分類し、上位概念を抽出した。

2.2 調査手順

調査は、実習直前（入所式にて）及び、直後（宿泊研修翌日の事後研修開始前）に実施した。調査主旨を説明した後に、用紙を配布して回答させた。回答後は、その場にて回収し、回収率は100%であった。

3. キャンプ実習の概要

3.1 キャンプ実習概要

本研究で対象としたキャンプ実習は、A大学の専門教育科目スポーツ実習の野外活動（キャンプ）であり、平成30年6~8月に事前・事後研修が合計3日間、宿泊研修が2泊3日の計6日間の日程で実施された。

3.2 指導体制

引率・担当教員は、A大学の専任教員3名が担当した。公益社団法人日本キャンプ協会公認指導者（キャンプディレクター1級）で、キャンプ全般に関する専門的な知識・技術を有する教員が、キャンプディレクター（キャンプ長）を務めた。その他には、キャンプ経験が豊富で、特に野外炊事に詳しい教員が1名、教員養成課程を担当し、特別活動指導法と保健体育科教育法などを担当する教員1名であった。

3.3 日程及びプログラム内容

平成 30 年度 A 大学キャンプ実習の日程とプログラムは、図 1-1、図 1-2 に示す通りである。なお、実習会場となったのは、G 県内のオートキャンプ場であった。

図 1-1 A 大学平成 30 年度キャンプ実習（宿泊研修）プログラム概要

Time	8/20 (月)	8/21 (火)	8/22 (水)
午前		起床	起床
		朝食・大正茶屋	朝食・大正茶屋
		キャンプ実習実技	キャンプ実習
		③自然観察・ハイキングビンゴ ④自然体験・沢遊び	⑧キャンプ事業企画 ⑨企画案のプレゼン
午後	現地集合・15:20	昼食・レストラン食	退所式
	入所式	キャンプ実習	
	キャンプ実習①	⑤野外活動・イニシアティブゲーム ⑥野外炊事	
	夕食・バーベキュー	夕食（野外炊事）	
	キャンプ実習②	キャンプ実習⑦	
	入浴（シャワー）	入浴（シャワー）	
	消灯	消灯	

4. 分析方法

キャンプ実習前後の「生きる力」は、28 の質問項目の回答を 6 段階評定で得点化し、平均値と標準偏差を算出した。実習前後の平均値の差の検定では、表計算ソフト「エクセル」により、対応のある t 検定を用いて平均値の差の検討をした⁴⁾。有意水準は、いずれも 5% 未満とした。

5. 倫理的配慮

全ての調査の開始にあたり、調査対象者には、口頭及び調査用紙の文中にて、回答は成績には全く関係なく、結果の公表に当たっては、個人が特定されることはない、と説明した上で回答させた。

図 1-2 A 大学平成 30 年度キャンプ実習（事前・事後研修）プログラム概要

日程	場所	カリキュラム	学習内容
6月13日 4限	大学	キャンプの特性	1 キャンプの目的と意義 2 キャンプの組織と種類、学校キャンプの組織構成 3 キャンプのマナーとルール 4 環境教育とキャンプ
6月20日 4限	大学	キャンプの対象	1 人間と自然の関係 2 人間の理解 3 自然の理解
8月23日 1・2限	大学	キャンプの安全	1 キャンプにおける安全の考え方 2 安全管理の実際①危険予知トレーニング・事故に学ぶ 3 安全管理の実際②健康・衛星管理
8月23日 3・4限	大学	さまざまなアクティビティ	1 野外ゲーム・自然を活用した遊びの考え方と企画立案 2 学校キャンプのキャンプファイヤーの目的と実際と企画立案
8月23日 5限	大学	キャンプ理論のまとめ	キャンプ理論のまとめ
		資格認定試験	日本キャンプ協会公認指導者資格インストラクター資格認定試験
		単位認定試験	

結果と考察

1. スポーツ学生のキャンプ経験などの基本的事項

本年度、キャンプ実習を履修したスポーツ学生の「履修目的（動機）」の結果を表3に示した。

表3 野外活動（キャンプ）の履修目的

区分	受講の目的	件数	記述の具体例
消極目的	単位取得	16	単位が必要、スキーの経験はあるがキャンプはない
関心 レジャー	アウトドアに関心がある	11	大人のキャンプに関心がある、スポーツとしてのキャンプを知る、楽しいキャンプ経験がしたい、楽しそう、キャンプの経験がなく興味がある
	自然体験を楽しみたい	9	キャンプがしたい、野外活動の魅力を体験する、キャンプが好き、何かに挑戦できる
	自然体験・非日常体験	7	普段はインドアなのでアウトドアを体験したい、癒しの空間体験、自然に触れたい
明確な目的	教職のため	7	教員免許を取得する、教員になる通過点
	アウトドア技能	5	就職先で活かせる技能を修得する、テント設営が上手になりたい、教える技能を習得する
	野外活動の専門知識習得	5	現在のキャンプが知りたい、スポーツコーチとしてキャンプの専門知識が必要
	コミュニケーション能力	4	教師に必要なコミュニケーション能力の習得、助け合いを通してコミュニケーション能力を向上させる
経験	楽しい経験があるから	4	小・中学性でのキャンプ実習が楽しかった、高校でのキャンプ実習が楽しかった、幼少期から家族キャンプを楽しんできたから、子どもの頃の経験から楽しいイメージがある
将来	将来に役立つ（ファミリーキャンプ）	4	将来、家族でキャンプに行きたい、自分でできるようになっておきたい
交流	仲間との交流	3	仲間を増やす、仲間と一緒にできる
		75	

n=39

履修目的は、75件抽出できた（1.92/人）。最も多かった履修目的は、単位取得で16件（41.03%）であった。ただし、多くの学生が単位取得と合わせて複数の目的を記述していた。しかし、少数ではあるものの単位取得が第一目的で、消極的な履修目的の学生も認められた。次いで、アウトドアに関心があるが11件（28.21%）、自然体験を楽しみたいが9件（23.08%）、自然体験・非日常体験が7件（17.95%）が挙げられ、自然体験活動に関心があり、前向きな姿勢で履修している学生が数多く認められた。また、「楽しい経験がある」と「将来に役立つ（ファミリーキャンプ）」といった意見もあった。これは、2017年度のオートキャンプ白書⁵⁾にて近年のキャンパーの増加要因に、団塊ジュニアが成長し、幼少期の楽しいキャンプ経験が思い出され、キャンプを楽しむ傾向がある、という報告と一致する結果を得た。加えて、教職希望学生による「教職のため」や「コミュニケーション能力」という強く明確な目的意識を持った学生の履修もあった。

これらの結果から、本年度は、日本キャンプ協会の基本的な自然体験活動プログラムがカリキュラム構成の中心に計画されたが、学校キャンプに対応できるプログラムを追加する必要がある。

キャンプ経験延べ日数と経験内容を表4と表5に示した。

表4 対象学生のキャンプ経験

キャンプ経験種別	人数
全くの初めて	9
テント泊以外でのキャンプ実習経験がある	5
テント泊と野外炊事の経験がある	12
テント泊の経験がある	2
野外炊事の経験がある	3
テント泊以外と野外炊事の経験がある	8
計	39

表5 対象学生のキャンプ実習経験

宿泊のべ日数	人数
0～2泊	27
3～4泊	8
5～8泊	2
10泊以上	2
計	39

キャンプ経験では、「テント泊と野外炊事の経験がある」が12名（30.7%）であり、3分の1に満たない数であった。そのため、「全く初めて」が9名（23.08%）や「野外炊事のみ経験がある」、「宿泊棟などを利用したキャンプと野外炊事の経験がある」といった経験が浅い履修者が多いことが明らかとなった。これは、本年度のみの結果であり、来年度以降は不明であるが、事前研修において調査し、それに応じた宿泊研修プログラムを計画する必要がある。また、表5で示した通り、キャンプの宿泊延べ日数は、27名（39.23%）のスポーツ学生が一泊以下であり、10泊以上は、2名（5.13%）にすぎなかった。

これらの結果から、キャンプの初心者（ビギナー）が、安心して楽しく自然体験ができる活動を用意し、実習後も継続してキャンプ活動が可能となるよう、基礎技能が習得できるプログラム計画の必要性がある。加えて、教職志望者など、高度な専門知識と技能を求める学生への対応も必要である。

2. 「IKR 評定用紙」によるスポーツ学生の「生きる力」

(1) 生きる力の総和

表 6 は、本研究で対象としたスポーツ学生のキャンプ実習前後の「生きる力」評定総和と平均値を示した。実習後の評定平均値は、統計的に有意な増加が認められた。

表 6 実習前後のスポーツ学生の「生きる力」の総和

	人数	「生きる力」(IKR 評定用紙)の総和 平均値±標準偏差	有意差
実習前	39	117.00 ± 17.16	*
実習後	39	133.40 ± 16.33	

* $p < 0.05$

これまで、「IKR 評定用紙」を用いた研究の多くが、宿泊を伴う自然体験活動を通して、児童の「生きる力」に対して効果があると報告している¹⁵⁾。それは、大学生を対象とした研究でも同様に報告されている³⁾⁸⁾¹⁶⁾。

橘ら¹⁶⁾は、より厳しい条件下での実施の方が、生きる力の向上に効果がある、とし、克服的要素を含んだ活動プログラム、穏やかな天候よりも雨天などの悪天候、宿舎での宿泊よりも野外でのテント泊、提供食よりも野外での自炊が「生きる力」を高めるとしている。今回のキャンプ実習では、暑熱環境下でのロッジでの宿泊や自然体験活動（自然散策と川遊び）、2回の野外炊事が実施された。テント泊ではなく、野外炊事の回数も少なかったにもかかわらず、評定値が有意に増加した要因として、市河ら³⁾の研究の評定値と比較して「生きる力」の総和が低値を示しており、多くのスポーツ学生がキャンプの初心者であり、初期値が低かったことが影響している可能性がある。

(2) 3つの上位能力と14の下位能力

キャンプ実習前後の3つの上位能力、すなわち「心理社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の各能力別の小計値を表7に示した。

表 7 対象学生の上位能力に関する実習前後の比較

上位能力	実習前	実習後	有意差
心理社会的能力	58.67 ± 19.73	66.72 ± 8.18	**
徳育的能力	35.00 ± 5.38	39.64 ± 5.12	**
身体的能力	23.36 ± 4.43	27.00 ± 5.10	*

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

3つの上位能力の全てで、統計的有意差が認められ、今回のキャンプ実習により、各能力が向上したと判断できる結果を得た。

次いで、上位能力を構成する14の下位能力について検討した結果が表8である。

キャンプ実習前後で、心理社会的能力を反映する14の質問項目と徳育的能力を反映する8の質問項目では、全ての項目で統計的有意差が認められた。身体的能力の「日常的行動」の「11. からだを動かしても、疲れにくい」では、0.33ポイントの増加があったが有意差は認められなかった。次いで「身体性耐性」の「14. 暑さや寒さに負けない」では、0.32ポイントの増加が認められ

たものの、有意差はなかった。そして、「野外生活・技能」の「25.洗濯機がなくても手で洗濯できる」は、0.18ポイントの微増でありその差は有意ではなかった。これらの有意差が認められなかった質問項目は環境条件とプログラム条件が影響していると考えられる。「質問11の疲れにくい」と「質問14の暑さに負けない」は、暑熱環境下での実習であり、夜間でも気温が下がらないため熱帯夜が続いた。そのため、体力が消耗してしまったことが影響していると考えられる。また、「質問25手で洗濯できる」は、本キャンプ実習が2泊3日の短期間宿泊研修であり、手で洗濯をする機会がなかったためと考えられる。

表8 対象学生のキャンプ実習前後のIKR評定の各項目得点

上位能力	下位能力	調査項目	実習前	実習後	有意差
心理的社会的能力	非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.23 ± 1.22	4.72 ± 1.05	*
		8. 小さな失敗をおそれない	4.12 ± 1.19	4.87 ± 0.98	**
	積極性	26. 自分からすすんで何でもやる	4.21 ± 1.13	4.64 ± 1.01	**
		7. 前向きに物事を考えられる	4.31 ± 1.00	4.87 ± 0.98	**
	明朗性	4. 誰にでも話しかけることができる	3.95 ± 1.40	4.77 ± 1.04	**
		17. 失敗しても立ち直るのがはやい	4.26 ± 1.16	4.74 ± 1.12	*
	交友・協調	28. 多くの人に好かれている	3.62 ± 1.16	4.26 ± 0.94	**
		23. だれとでも仲よくできる	4.31 ± 1.08	4.87 ± 0.95	**
	現実肯定	24. 自分のことが大好きである	3.72 ± 1.30	4.18 ± 1.17	**
		15. 誰にでも、挨拶ができる	5.00 ± 0.98	5.26 ± 0.88	*
視野・判断	13. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.89 ± 1.23	4.44 ± 0.97	**	
	3. 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.92 ± 0.84	4.95 ± 0.83	**	
適応・行動	6. 人の話をきちんと聞くことができる	4.66 ± 1.13	5.26 ± 0.88	**	
	9. その場でふさわしい行動ができる	4.46 ± 1.02	4.90 ± 0.85	**	
徳育的能力	自己規制	12. 自分勝手な、わがままを言わない	4.54 ± 1.05	4.90 ± 1.00	*
		20. お金やモノのむだ使いをしない	3.41 ± 1.41	4.18 ± 1.34	**
	自然への関心	5. 花や風景などの美しいものに感動できる	4.48 ± 1.07	5.03 ± 1.14	*
		18. 季節の変化を感じることができる	4.51 ± 1.17	5.08 ± 0.81	**
	まじめ・勤勉	10. いやがらずに、よく働く	4.41 ± 1.25	4.97 ± 0.96	**
		27. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりやる	4.67 ± 0.93	5.38 ± 0.75	**
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.39 ± 1.07	5.10 ± 0.82	**	
	21. 人の心の痛みがわかる	4.59 ± 1.07	5.00 ± 0.92	*	
身体的能力	日常的行動	19. 早寝早起きである	3.05 ± 1.38	4.49 ± 1.25	**
		11. からだを動かしても、疲れにくい	3.82 ± 1.23	4.15 ± 1.44	n.s.
	身体的耐性	14. 暑さや寒さに、負けない	4.31 ± 1.30	4.64 ± 1.25	n.s.
		22. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.18 ± 1.29	4.82 ± 1.07	**
	野外生活・技能	16. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.03 ± 1.44	4.74 ± 1.04	**
		25. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.97 ± 1.42	4.15 ± 1.42	n.s.

** : p < 0.01, * : p < 0.05
n.s. = 有意差なし

今回のキャンプ実習では、28の質問項目のうち、25項目で評定平均値が増加し、統計的有意差が認められた。それにより、中間尺度の心理的・社会的能力、徳育的能力、身体的能力の全ての能力の値が増加し、結果としてその総和である「生きる力」が向上するという結果を得た。すなわち、「生きる力」評定値によれば、A大学平成30年度キャンプ実習は、「生きる力」のポイントが向上するキャンプ実習であったと判断できる結果を得た。

3. 自由記述による回答結果

表9 対象学生が導き出したキャンプの意義

意義	件数
多様なコミュニケーション	24
非日常体験の経験	17
種々の自然体験	17
集団生活による助け合い・協調性・気配り	13
生きる力・生命力	10
自然への敬意・感謝・共存	8
文明への感謝	6
自己制御能力, ルール	5
自主性	4
自然における活発な身体活動	3
精神的成長の実感	2
自然体験の楽しさ・感動を実感	2
創造力	2
日常の振り返り	2
リフレッシュ	2
規則正しい生活	2
専門知識・技能体得	1
計	120

本研究では、スポーツ学生がキャンプ実習で判じた「キャンプの意義」を自由記述により調査し、その結果を表9に示した。

スポーツ学生により記述された「キャンプの意義」は、117件(3.00/人)であった。すなわち、最大3件まで記述するよう指定された「キャンプの意義」にて、全ての学生が最大の3件を記述したことを意味する。最も多く記述された項目は、「多様な仲間とのコミュニケーション」で24件(61.54%)であった。次いで、「非日常体験の経験」と「種々の自然体験」が、それぞれ17件(43.59%)であった。そし

て、「集団による助け合い」が13件(33.33%)であった。

これらの意義を概観すると、自然環境とキャンパー仲間といった外部には目が向けられているが、学生自身の内部に対しては目が向けられていない。その関連項目である「日常の振り返り」は2件に過ぎなかった。この結果は、甲斐ら⁸⁾による大学生を対象としたキャンプ実習と同様な結果であった。次回以降のプログラムでは、学生自身が自分自身と向き合う活動を組み込む必要性があると考えられる結果であった。

4. 今後の課題（スポーツ経営学を専攻する学生の特性に応じたプログラム計画）

A 大学スポーツ経営学科では、スポーツ経営学を専攻する学生にスポーツをビジネスとして捉える思考や感性を育てることがカリキュラムポリシーに明記されている。そのため、キャンプ実習でも、野外教育の一環としての自然体験活動の専門知識・技能の習得に留まらず、レジャー・レクリエーション産業の一つとしてキャンプビジネスを考えられる視点を教育することを実習の目的として明記されている。

スポーツ経営学やスポーツビジネスを専攻する学生を対象に、「野外活動（キャンプ）」を開講する意義は大きい。なぜなら、近年のオートキャンプやグランピングといったレジャー・レクリエーションとしての野外活動・キャンプの市場規模や参加人口の増加は決して軽視できない状況にあるからである。

一般社団法人日本オートキャンプ協会⁵⁾は、「オートキャンプ白書 2018—寒くたってキャンプ—」を発行し、2017年度の活動状況を「キャンパー」、「キャンプ場」、「用品」、「クルマ」と4分野に分けて調査・分析し、その結果を発表した。それによると、『2017年は、近年人気が高まる「秋キャンプ」のシーズンに連休が少なく、また台風などの接近により天候に恵まれなかったが、その一方でキャンプシーズン後半の「冬キャンプ」の需要が高まった。それを示すようにキャンプ場の利用月のデータでは11月、12月、1月、2月、3月いずれも前年を上まわり、また冬季のキャンプ用品の販売も好調であった。2017年に、1回以上キャンプを経験した人の数を示す「キャンプ参加人口」は、840万人と2016年の830万人を1.2%上回り、5年連続して前年比がプラスとなった。こうした背景には前述の冬季の活性化の他、平日利用者の増、加えて、90年代のキャンプブーム時代に家族とキャンプを経験した団塊ジュニアの世代が中心に参加していることなどがあげられる。』と報告している。

つまり、1990年代半ばには、1600万人前後のキャンパー（参加者人口）があったが、2005年前後には、800万人程度にまで減少した。しかし、近年は、1990年代にキャンプを経験した子ども世代「団塊ジュニア」が成人し、キャンプを訪れる傾向にあると考えられている。それにより、車を利用したオートキャンプの参加人口は5年連続で増加し、その2割程度が経験1年未満の初心者であると報告している。加えて、近年活況著しい「グランピング・ビジネス」も無視できない存在になりつつある。

今回のキャンプ実習では、オートキャンプ場を実習会場とした。そこには、コテージを利用するファミリーや、スポーツ少年団の団体利用客、外国人客、学生などの若年層利用客が多数あった。これらのことから、今後のキャンプ実習には、スポーツ経営学専攻学生ならではの、レジャーとしての「キャンプ産業」を考えるプログラムも組み込む必要があるのではないかと考えられた。

まとめ

本研究では、A大学平成30年度キャンプ実習の成果を検討し、より充実した実習プログラムを計画するため、履修学生の39名を対象に自記式質問紙調査を実施した。今回の調査では、先行研究を参考に、学生の実習前後の「生きる力」の変容に焦点を当て、実習成果の検討を試みた。

その結果、次のことが明らかとなった。

- 1) 本実習に参加した学生の多くがキャンプ初心者に属していた、次年度以降同様な傾向であれば、継続的なキャンプ活動ができるよう、自然体験活動の楽しさが実体験できるプログラムを準備する必要がある。
- 2) スポーツ学生を対象としたキャンプ実習（事前研修・2泊3日の宿泊研修・事後研修）は、「IKR 評定用紙」を用いて測定された「生きる力」を有意に増加させるキャンプ実習であったと判断できる結果を得た。

- 3) 暑熱環境下で実習が実施されたため、身体的能力に関連する「疲れにくい」と「暑さに負けない」の項目は有意なポイントの増加が認められなかった。また、「手で洗濯できる」は、2泊3日の短期間実習であったため、そのような経験ができなかったため、実習前後で有意差はなかった。
- 4) スポーツ学生が見出した「キャンプの意義」では、全ての学生が意義を記述し、最も多かった回答は、「多様な仲間とのコミュニケーション」であった。しかし、自分自身と向き合う記述は僅かであり、次年度以降の課題となった。

付記

本研究で調査対象となったスポーツ実習「野外活動（キャンプ）」の実施に当たっては、経営学部教授の岸順治先生、准教授の伊藤嘉人先生のご支援とご指導を頂戴した。また、本研究で調査対象となった参加学生には、調査主旨をご理解し、快く協力していただいた。また、調査資料の一部に、岐阜協立大学教務課、課長補佐大江春彦氏の資料を引用した。記しここに厚く感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 1) 独立行政法人国立青少年振興機構(2010)体験活動による「生きる力」の変容が見える！・事業評価に使える！「生きる力」の測定・分析ツール、
http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/69/（平成30年9月20日アクセス）
- 2) 市河勉・三宅孝昭・新戸信之（2013）キャンプ体験が保育専攻学生の社会的スキルに及ぼす影響について、松山東雲短期大学研究論集第43号，p5-61
- 3) 市河勉・新戸信之・三浦累美・三宅孝昭（2018）自然体験活動が保育専攻学生の生きる力に及ぼす影響―「キャンプ実習」からの検討―，松山東雲短期大学研究論集第4号，p138-150
- 4) 出村慎一・小林秀紹・山次俊介（2001）パラメトリック検定・平均に関する検定，出村慎一（編），Excelによる健康・スポーツ科学のためのデータ解析入門，大修館書店，p102-105
- 5) 一般社団法人日本オートキャンプ協会（2017）オートキャンプ白書2017
- 6) 甲斐知彦・溝畑潤・河鯖一彦（2004）キャンプ授業における学生授業評価について，スポーツ科学・健康科学研究 関西学院大学スポーツ科学・健康科学研究室第7号，p49-53
- 7) 甲斐知彦・佐藤博信・溝畑潤・河鯖一彦（2005）キャンプ集中授業における学生授業評価―夏期アウトドアと海洋キャンプを比較して―，スポーツ科学・健康科学研究 関西学院大学スポーツ科学・健康科学研究室第8号，p17-23
- 8) 甲斐知彦・佐藤博信・林直也（2006）キャンプ集中授業における学生授業評価～生きる力評定用紙を用いた評価～，関西学院大学スポーツ科学・健康科学研究第9号，p13-17
- 9) 公益社団法人日本キャンプ協会（2018）公益社団法人日本キャンプ協会公認キャンプ・インストラクター養成 課程認定団体マニュアル2018年度版，p8-10
- 10) 文部省（現，文部科学省）（1996）審議会答申等，21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申），http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuouou/toushin/960701.htm（2018年9月21日アクセス）
- 11) 文部科学省（2009）教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成，幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書，

- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm (平成 30 年 9 月 19 日アクセス)
- 12) 文部科学省 (2011) 幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領改訂のポイント, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf (2018 年 9 月 18 日アクセス)
 - 13) 文部省・青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議 (1996) 青少年の野外教育の振興について
 - 14) 橘直隆・平野吉直 (2001) 生きる力を構成する指標, 野外教育研究第 4 巻第 2 号, p11-16
 - 15) 橘直隆・平野吉直・関根章文 (2003) 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響, 野外教育研究第 6 巻第 2 号, p45-56
 - 16) 橘直隆・蓬田高正・土方圭 (2003) 野外運動の授業が学生の生きる力に及ぼす影響, 大学体育研究第 25 号, p19-29